
平成30年度 第1回

桐蔭学園 高等学校 学力検査問題

国 語

平成30年2月11日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 机の上には、鉛筆・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生どうしの貸し借りもできません。また、机の中には、自分のマークシート冊子以外、何も入れてはいけません。
3. 携帯電話は、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子の印刷が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、鉛筆を落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子の余白などは、自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 問題は16ページまであります。
7. 問題冊子は持ち帰ってください。

第一問 語句に関する次の各問に答えなさい。

問1 次のA～Eの各文について、傍線部のカタカナと同じ漢字を用いる語として適当なものを、それぞれの選択肢の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

A 国外からのイミンを受け入れるかどうかを検討されている。

1 彼の主張には、イロンをさしはさむ余地がない。

2 大臣のイホウ行為がマスコミで話題になった。

3 インターネットの普及により、新しい社会へのイコウが急速に進んだ。

4 彼の怒鳴り声に、周囲の人たちはみなイシユクしてしまった。

B 彼の論文は、国内外から絶大なヒョウカを受けた。

1 今週は、工場が毎日二十四時間カドウしています。

2 この一戦に、チームのシンカが問われる。

3 電話線のカセツ工事が行われている。

4 故障の原因は、一部の部品にフカがかかりすぎたことだ。

C わが社は、東京をキョテンとして関東一円に営業を展開する方針だ。

1 祖父は、近所の人たちから「ごインキョさん」と呼ばれている。

2 公園に投棄されたゴミをテツキヨする。

3 金メダル獲得というカイキョに、日本国中がわいた。

4 教科書にジュンキョした問題集を買った。

D ひとつのミスをきっかけに、試合のキンコウが破れた。

1 被災地のフツコウ支援の募金に協力した。

2 体操選手はヘイコウ感覚にすぐれている。

3 今度の大会では、日本記録のコウシンが期待される。

4 コウガイに新しい住宅地が建設されている。

E 会議では、ポウトウから白熱した議論が戦わされた。

1 都内ポウショで、大物政治家どうしの会談が行われた。

2 ポウダイなデータを分析しなければならない。

3 姉はポウセキ会社に勤務している。

4 彼はポウケン家として名をはせている。

問2 次の傍線部の慣用句の使い方として適当なものを全て選び、その番号をマークしなさい。

- 1 ほしい服があったが、値段を見て二の足を踏んでしまった。
- 2 ぼくはあの店に顔が立つから、みんなで行こうよ。
- 3 重苦しい雰囲気の中、彼女が話の口を切った。
- 4 今回、彼は木で鼻をくくるようなぬかりない行動に終始した。
- 5 彼の横柄な態度に、周囲の人はみな目を細めた。
- 6 そんなにはつきりと批判したら、角が立つと思うよ。

問3 次の四字熟語の□に当てはまる漢字をそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

- | | | | | |
|-------|-----|-----|-----|-----|
| ①栄□盛衰 | 1 枯 | 2 古 | 3 故 | 4 誇 |
| ②言語□断 | 1 堂 | 2 動 | 3 同 | 4 道 |
| ③順風満□ | 1 飯 | 2 般 | 3 帆 | 4 範 |

問4 次の傍線部の敬語の使い方として適当なものを全て選び、その番号をマークしなさい。

- 1 どうぞケーキをいただきます。
- 2 明日こちらからうかがいます。
- 3 傘はわたしの方でお返しになっておきますので、ご心配なく。
- 4 さきほどそちら様からご質問申し上げた件について、お答えいたします。
- 5 あなたが心配されるのもつともです。

第二問 次の文章を読んで後の設問に答えなさい。

ある夏の夜、住宅街を歩いていると、数メートル先の道ばたに小さな黒いかたまりがあった。しゃがんで見てみるとメスのカブトムシであった。このままだと車につぶされてしまうとと思い、そばの生け垣にうつした。久しぶりにカブトムシに触った。カブトムシはありふれた昆虫ではなくなったのかもしれない。

思えば、私が子どもの頃はすでにカブトムシがスーパー、ホームセンター、百貨店に並んでいた。《ア》≡、カブトムシは商品として売られていた。そしてそのことに違和感があったのを覚えている。カブトムシなんて売り買いする商品ではなく、山に捕りにいくものだろうと子どもながらに感じていた。私は子どもの頃、都市の生活をしてきたものの、夏の夜には住んでいたマンションの駐車場の電灯の下をきよろきよろしていると運良くカブトムシを捕まえることができた。それでもカブトムシは商品として売られていた。さらに私の母の実家はたいへんな山奥で夏に母の実家を訪ねればカブトムシはありふれた昆虫であった。それでもカブトムシは商品として売られていた。したがって、単純に珍しい昆虫だからという理由だけで商品になっているわけではない。

《イ》≡、なぜカブトムシは商品として売られるようになったのか。この問いにこたえるのが本章の目的である。そのため、少し環境思想してみよう。

われわれの歴史は、自然を社会化してきた歴史ともいえる。少し表現をかえるならば、これまでにわれわれは生活のなかに自然を取り込んできた。自然を社会化することは大きく二つに分けることができる。

第一に、労働による自然の社会化である。われわれは動物を狩り、魚を捕り、木の実を拾う営み、すなわち漁労も含めて狩猟採集を行ってきた。そして、種を植え、あるいは苗を植え、作物を収穫する農耕、そして家畜を飼育する牧畜も行ってきた。この農耕牧畜において、われわれは労働を通して自然を人間の社会に取り込みはじめた。すなわち、労働による自然の社会化をはじめたのである。

その一方で、われわれの自然の見方を規定する、文化による自然の社会化を見逃すわけにはいかない。いにしえからわれわれは星空を眺めてきた。《ウ》、《星と星とをつなげ、星のまとまりを星座と呼び、その星のまとまりから神話の世界などを想像していた。不思議なもので、われわれは一度その星のまとまりを秩序ある星座と捉えると、もはやばらばらな星の無秩序なあつまりとは見えなくなる。冬空に三つの一直線に並んだ星を見るとオリオン座だと即座に反応する人も少なくないのではないか。このようにわれわれはある①フィルターを通して、自然を眺めている。これをさしあたり文化と呼ぼう。

文化を通して自然を見ることをもう少しみておこう。一方で、ある文化は牛を見て家畜だと捉えるが、他方で、ある文化では牛は聖獣であると捉える。文化によって自然がどのように捉えられるかが異なる。したがって、それぞれの文化によって自然をどう捉えるか、もっといえば、文化のなかで自然がどう位置づくかが違うのである。それもそのはずで、それぞれの文化は、その土地の風土と切り離すことができない。さまざまな風土のなかで生活していくことを通じて文化が形成された。たとえば、日本であれば日本の風土における四季折々の自然の変化を踏まえて^{※1}歳時記が育まれていった。つまりさまざまな自然条件を取り込むことで文化が育まれていった。これが、第二の文化による自然の社会化である。

さて、ここまで論じてきたように、自然の社会化は労働による自然の社会化と②文化による自然の社会化と大きく二つに分けることができる。そして、この両者はそれぞれ別々の側面を備えながらも深い関係がある。たとえば、歳時記は《農》なしには生まれなかつただろうし、歳時記なしには《農》は不可能だつただろう。カブトムシの話に戻れば、カブトムシを商品として捉えるようになったことは、自然の社会化の視点が欠かせない。文化による自然の社会化から言えば、われわれはカブトムシをいつしか里の昆虫ではなく、売り買いする商品として捉えるようになった。そして、労働による自然の社会化から考えれば、われわれが里の生活を手放し、都市の労働を通して自然を社会化していたことの結果であると考えることができる。

では、われわれが里の生活を手放した結果、どのような労働を通じて自然を社会化するようになり、どのような文化によって自然を社会化しているのだろうか。

少々単純すぎるかもしれないが、大きく人類史を捉えると以下のようになる。

そもそもは自然のなかにわれわれがあったとも言える。狩猟採集においては自然の秩序のなかにわれわれが従っていた。その後、農耕牧畜にうつるなかで、われわれが徐々に自然と距離を取り始める。本章で里の生活という場合、この農耕牧畜の生活を指している。そして産業革命後の化石燃料にA依存した都市の生活において③人間と自然の関係は一変する。われわれの自由な思考や知的な想像力と裏腹ではあるが、われわれが自然を支配する構図となると同時にグローバルに社会環境が拡大することと相まって人間にとつての環境としての自然が大きく拡大する。身近な自然環境だけでなく、地球の反対側の森や川まで自然環境になる。われわれは普通の生活をしながら、地球の反対側の自然を破壊している。日本で使われている木材の多くは海を渡ってきていることを忘れてはならない。

ここでいう都市の生活というのは、都市と農村に区別する意味での都市の生活ではなく、商品に囲まれた生活を都市の生活と呼ぶ。われわれの生活を眺めてみると、この[※]ブックレットも商品であり、道路として舗装されたアスファルトも商品であったし、洋服も商品であり、食べ物もそのほとんどがスーパーやコンビニで買った商品である。そして、なにより労働力「商品」としてわれわれ自身が商品となる。商品とはそもそもわれわれにとつては、よそよそしいものである。ここでもカブトムシを例に取るならば、自分で取ってきたカブトムシ、あるいは友達が取ってくれたカブトムシではなく、商品としてのカブトムシは最初から商品として売るために大量に効率よく作られた、生産者の側にとつても、購入する消費者の側にとつてもよそよそしいカブトムシである。よそよそしいものである商品に囲まれてわれわれは生き、われわれ自身が商品になりながら商品を作り出す労働をしている。したがって、④「いなか」に住んでいても、現代社会における日本に住まうひとびとのほとんどが都市の生活を営んでいるといつてよい。

では都市の生活にうつるまえの生活はどのようなものだったのだろうか。それが里の生活である。里の生活の最大の

特徴は、⑤人間と自然の物質循環を取り結ぶ〈農〉が営まれている点である。ここでは、産業としての農業と区別するために、〈農〉という言葉を使いたい。里の生活における〈農〉に欠かせないのが里山である。しばしば里の生活における自然循環は大きく三つにわけられて理解される。第一にわれわれが足を踏み入れることのない奥山、第二に里山、第三に農地と生活空間である里である。ここでは、奥山と里との間にある里山に着目したい。

カブトムシは里山の昆虫である。カブトムシがいるということは、里山があるということであり、里山があるということは〈農〉が営まれているということでもある。〈農〉を営むためには、里山を適切に管理しなければならぬ。その里山は、里に住むみんなの土地という意味でコモンズとも呼ばれる。コモンズは、里山、里海としてわれわれの生活に欠かせなかった。コモンズとしての里山は薪炭の供給地であり、農地を豊かにする落ち葉などの供給地でもあり、日本の山村の代名詞でもある。里の生活には里山が欠かせなかった。里山がはげ山になってしまわないように、過剰に薪をとらないなど里山を管理するルールが定められていた。コモンズとしての里山を管理していた結果として、里山の昆虫が里に住まう人間とともに生きていたのである。たぐさんの葉を落とし、農地を豊かにする落葉広葉樹と切っても切れないカブトムシがいなくなったことは、コモンズとしての里山がなくなったことを象徴している。

里、里山、奥山はひとつの物質循環の単位であった。たとえば水をとってみても、奥山から里山へ、里山から里へ流れていき、また雨が降ることによって奥山に水が戻り、貯^{たくわ}えられる。他方で、人間もひとつの物質循環の単位である。人間の身体も一方でかたちとしての同一性を保ちながら、他方でなかみである物質はある一定期間で入れ替わっている。すなわち、人間の身体も物質循環のただなかにある。その人間と自然の物質循環を取り結んでいたのが〈農〉であり、〈農〉を営むためには、里、里山、奥山という物質循環の単位が里の生活においては欠かせなかった。

《エ》、都市の生活は、その持続可能な物質循環を断ち切った。森林を非持続的に利用しつくし、化石燃料も利用し、化学物質によって汚染しつくす勢いである。〈農〉にとってかわった農業も工業生産物である農薬や肥料を大量に投入することとなりたっている。工場で作られた窒素化合物が大量に農地に投入されているが、その窒素がもとの場所に

戻って循環することはない。物質循環の仕組みがないところでは、里、里山、奥山という物質循環の単位は人間にとって必要なくなり、里山はコモنزとして管理されず荒廃していく。その結果が、野生動物の里への侵入であり、カブトムシが商品として買わなければならない代物になってしまうことである。

カブトムシが商品として売られていることは、人間と自然の物質循環をB媒介する里の労働から、商品を生み出す都市の労働へと変化したことを示している。里の労働を通じて社会化された自然から、都市の労働を通じて社会化された自然に変容していき、その結果、自然を商品として捉えることとなる。その都市の労働による自然の社会化は、自然を人工的に改変し、人工的なものに価値を見出す都市の文化を支えうる、文化による自然の社会化にも深く影響を与えることになる。

最初の問いに戻ろう。なぜカブトムシは商品として売られるようになったのか。それは直接的には、カブトムシがすまうコモنزとしての里山を破壊していったこと、そしてその背景には、自然を商品として見るようになったことがある。そのように考えれば、カブトムシが商品として売られていることは、人間と自然の持続可能な物質循環に亀裂が入っていることの象徴であるといえる。カブトムシが商品として扱われること、言い換えれば自然が商品として捉えられることは、われわれの生活や文化のなかに深く、そして広く浸透している。われわれは人間や自然を商品として扱うことにはしばしば疑問を持たなくなっていることは自然を商品として扱うことが深く浸透していることの証拠であるし、われわれが日本にいながら世界各国のカブトムシに出会うことができることも商品交換がグローバルな規模で広く行われていることの象徴でもあるのだ。

大事なことなので強調しておきたいが、人間と自然の物質循環に入った亀裂を修復することは、そのまま過去の生活や文化を取り戻すことを意味しない。言い換えれば「古き良き」伝統を回復することとイコールではない。都市の生活や文化を踏まえた新しい物質循環の単位を考える必要がある。本論の延長として新しい物質循環の単位を考えるポイントを簡単に述べておくならば、それは人間と自然の脱商品化である。商品として扱うことが根本的な原因であれば、商

品として扱うことをやめるか、制限すること、すなわち脱商品化を目指すのは当然のことだろう。したがって、人間と自然を商品として扱わない、人間と自然を商品とはみない見方を基礎とした生活や文化の実践を積み上げていくことが肝要なのである。そしてその先に新しい物質循環の単位が構想しうるのではないだろうか。

(大倉 茂^{おおくら しげる} 『カブトムシから考える里山と物質循環』)

(注) ※1 「歳時記」：一年の折々の自然や人事などを記した書物。

※2 「ブックレット」：冊子。

問1 本文中の空欄《ア》《イ》《エ》に当てはまる語として適当なものをそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。ただし、同じ番号を二度以上使ってはいけません。

- 1 では
- 2 しかし
- 3 たとえば
- 4 つまり
- 5 はたして
- 6 そして

問2 二重傍線部A・Bの語句の本文中での意味として適当なものをそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

A 「依存した」

- 1 たよった
- 2 注目した
- 3 見切りをつけた
- 4 任せた

B 「媒介する」

- 1 たもち続ける
- 2 間に立つてとりもつ
- 3 活発に進める
- 4 明確に示す

問3 傍線部①「フィルターを通して、自然を眺めている」とありますが、星空を眺める具体例においては、どのようなフィルターを通して、何を眺めていると述べられていますか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 星のまとまりという自然のフィルターを通して、神話の世界を眺めている。
- 2 星座という自然のフィルターを通して、星のまとまりを眺めている。
- 3 神話の世界という文化のフィルターを通して、星座を眺めている。
- 4 星座という文化のフィルターを通して、星を眺めている。

問4 傍線部②「文化による自然の社会化」とは、どのようなことを意味していますか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 人間が文化を通して自然を敬うことで、自然と人間社会とを密接に結びつけること。
- 2 人間が自然の変化を敏感に察知することで、四季折々の文化を形成すること。
- 3 人間が文化を通して自然を見ることで、自然を社会の中に位置づけること。
- 4 人間が地域による自然条件の差異を理解することで、異文化を認め合うこと。

問5 傍線部③「人間と自然の関係は一変する」とありますが、どのように変わったのでしょうか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 人間が自然を一方的に利用し、地球規模で自然を破壊するようになった。
- 2 人間が自然の秩序に従うことをやめ、自然から独立するようになった。
- 3 人間が自然に対する想像力を失い、理不尽に自然を破壊するようになった。
- 4 人間が自然を文化的な対象として、自分たちの社会に取りこむようになった。

問6 傍線部④「いわゆる『いなか』に住んでいても、現代社会における日本に住まうひとびとのほとんどが都市の生活を営んでいる」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 現代日本社会においては、都市から離れた場所に住んでいる人間も、都市部の消費者のために大量の商品を作り出す生活を送っているということ。
- 2 現代日本社会においては、自分が生まれ育った場所にずっと住んでいる人間も、都市部に出稼ぎに行く生活を送っているということ。
- 3 現代日本社会においては、〈農〉が営まれている場所に住んでいる人間も、より安価な他国の商品を求める生活を送っているということ。
- 4 現代日本社会においては、身近に自然が存在する場所に住んでいる人間も、商品に囲まれる生活を送っているということ。

問7 傍線部⑤「人間と自然の物質循環を取り結ぶ〈農〉が営まれている」とありますが、「〈農〉が「人間と自然の物質循環を取り結ぶ」ことによって、どのようなことが可能になると考えられていますか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 人間が自然から恵みを得ながら、その一部を自然に還元すること。
- 2 人間が自然の脅威から身を守りつつ、自然の秩序に従って生活すること。
- 3 人間が自然との共生を営みながら、自然から恩恵を受け続けること。
- 4 人間が自然に足を踏み入れないように配慮しつつ、自然を持続的に活用すること。

問8 筆者は、「なぜカブトムシがスーパーや百貨店で売られているのか」という考察を通して、どのような問題点を指摘していますか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 自然を支配することが当然だと捉える見方が、人間が自然よりも上位だというおごりを生んでいる点。
- 2 商品に囲まれた都市の生活を最上とする見方が、文化による自然の社会化の停滞をもたらしている点。
- 3 自然と人間を商品として捉える見方が、人間と自然とのあいだの物質循環を不可能にしている点。
- 4 人工的なものに価値を置く見方が、新たな物質循環の単位を構築することを阻害している点。

第三問 次の文章を読んで後の設問に答えなさい。

今は昔、丹後の国に老尼ありけり。地蔵菩薩は①暁ごとに歩き給ふといふことを、ほのかに聞きて、暁ごとに地蔵見奉らむとて、ひと世界惑ひ歩くに、^{※1}博打の打ちほうけて居たるが見て、「尼君は、寒きに何わざし給ふぞ」といへば、「地蔵菩薩の暁に歩き給ふなるに、あひ参らせむとて、かく歩くなり」といへば、「②地蔵の歩かせ給ふ道は、我こそ知りたれば、いざ給へ、あはせ参らせむ」といへば、「③あはれ、嬉しきことかな。地蔵の歩かせ給はむ所へ、我を率ておはせよ」といへば、「我に物を得させ給へ。④やがて率て奉らむ」といひければ、「この着たる衣奉らむ」といへば、「いざ給へ」とて、隣なる所へ率て行く。

尼よろこびて急ぎ行くに、その子に、^Aぢぢうといふ童ありけるを、それが親を知りたりけるによりて、「^Bぢぢうは」と問ひければ、親「遊びに去ぬ。今来なむ」といへば、「^{※2}くは、ここなり。⑤ぢぢうのおはします所は」といへば、尼嬉しくて、^{※3}紬の衣を脱ぎて取らずれば、博打は急ぎて取りて去ぬ。

尼は地蔵見参らせむとて居たれば、^⑤親どもは心得ず、などこの童を見むと思ふらむと思ふほどに、十ばかりなる童の来たるを、「くは、^Dぢぢう」といへば、尼、見るままに^⑥是非も知らず、臥し転びて拌み入りて、土にうつぶしたり。童、^{※4}櫛をもてあそびけるままに來たりけるが、その^{※5}櫛して、手すさびのやうに額をかけば、額より顔の上まで裂けぬ。裂けたる中より、^⑦えもいはずめでたき地蔵の御顔見え給ふ。尼拌み入りてうち見あげたれば、かくて立ち給へれば、涙を流して拌み入り参らせて、^⑧やがて極楽へ参りけり。

(注) ※1 「博打」…かけ事をする人。ばくち打ち。

※2 「くは」…ほら。さあ。

※3 「紬」…絹織物の一つ。

※4 「梶」…細い枝を折ったもの。

※5 「梶して」…梶を使って。

問1 傍線部①「暁」の意味として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 明け方
- 2 昼時
- 3 夕暮れ時
- 4 深夜

問2 傍線部②「地藏の歩かせ給ふ道は、我こそ知りたれば、いざ給へ、あはせ参らせむ」とありますが、このように言っている「博打」の考えとして最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 世間知らずな尼をからかって笑いものにしてやろう、という考え。
- 2 けなげな尼をあわれに思い、親身に相談にのってやろう、という考え。
- 3 地藏菩薩に対する尼の信仰心の深さを試してやろう、という考え。
- 4 親切なふりをして、尼から何かしらをだましとってやろう、という考え。

問3 傍線部③「あはれ、嬉しきことかな」と「尼」が感じた理由として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 地藏菩薩にお会いしたいと思っていたのが自分だけでないと分かったから。
- 2 地藏菩薩も、この同じ道をお歩きになったことがあると博打が教えてくれたから。
- 3 お会いしたいと思っていた地藏菩薩に会わせてくれると博打が言ったから。
- 4 博打が、お会いしたいと思っていた地藏菩薩の化身であることを知ったから。

問4 傍線部④「やがて率て奉らむ」・⑦「えもいはず」の意味として最も適当なものを次からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

④「やがて率て奉らむ」

1 しばらくしたら地蔵菩薩をお迎えに行きましょう。

2 このまま地蔵菩薩のところに行かれますか。

3 すぐに地蔵菩薩のところにお連れいたしましょう。

4 間もなく地蔵菩薩がお見えになるはずです。

⑦「えもいはず」

1 言葉では言い表せないほど

2 口に出すのものはばかられるほど

3 開いた口がふさがらないほど

4 声をかけることもできないほど

問5 二重傍線部A～Dの「ぢぎょう」の中で、一つだけ異なるものを指しているのはどれですか。適当なものを一つ選び、そのアルファベットをマークしなさい。

問6 傍線部⑤「親どもは心得ず」とありますが、どのようなことに対して「心得ず」だったのですか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

1 博打がなぜ自分たちの子どもを探しているのかということ。

2 博打がなぜ尼に対して親切にしているのかということ。

3 尼がなぜ自分たちの子どもに会いたいと思っているのかということ。

4 尼がなぜ自分たちの家に地蔵菩薩がいるかと思ひこんでいるのかということ。

問7 傍線部⑥「是非も知らず」とありますが、この表現から「尼」のどのような気持ちを読み取れますか。その説明として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 帰って来た童を地蔵菩薩だと頭から信じこんでいる。
- 2 地蔵菩薩だと言われたのに、童が現れたことに怒っている。
- 3 地蔵菩薩が童の姿になって現れたことに驚いている。
- 4 親が童のことを地蔵菩薩と呼んでいることに戸惑っている。

問8 傍線部⑧「やがて極楽へ参りけり」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 博打にだまされた尼を憐れに思った地蔵菩薩が、博打をこらしめるとともに、尼を極楽に導いたから。
- 2 尼の期待を裏切ってしまった地蔵菩薩が、おわびのしるしに童を使いとして送り、尼を極楽に導いたから。
- 3 尼の純粹な信仰心に報いるため、地蔵菩薩が童の姿を借りて尼の前に現れ、尼を極楽に導いたから。
- 4 尼から衣を供養された地蔵菩薩が、その供養に感心して尼の前に現れ、尼を極楽に導いたから。

問9 この話にこめられた教訓として最も適当なものを次から一つ選び、その番号をマークしなさい。

- 1 むやみに人の話を信じると、ひどい目に合うので注意すべきである。
- 2 他人を幸せにするためであれば、時には嘘をつくことも必要である。
- 3 仏の慈悲にすぎるためには、自らの損得を考えず供養することが肝要である。
- 4 疑いの心をさしはさまず、深く純粹な信仰心を持つことが大切である。

(おわり)